

患者さんの不安に寄り添い 確かな診断を

阿部 一之助

(株式会社秋田病理組織細胞診研究センター 代表取締役)



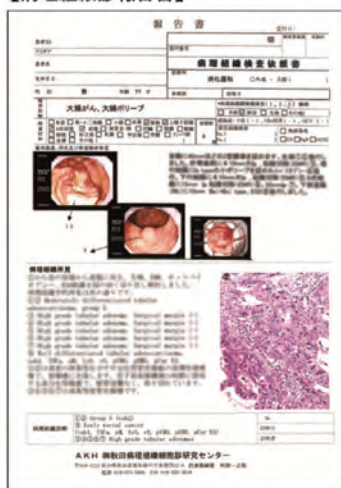
■病理診断の地域医療格差をなくしたい！

当研究センターの主な事業は細胞診断と組織診断です。細胞診断は細胞検査士が診断します。子宮がん検診や乳がん検診などで採取した細胞、また痰、尿などに含まれる細胞が良性か悪性かを判断する補助的診断です。病理診断は病理医が診断します。内視鏡などで採取した組織や手術で摘出した臓器の標本を作製し、顕微鏡で観察してがんの有無や早期癌か進行癌かを見極め、治療法を決定する最終診断となります。

秋田県の病理医数は全国的にみても少なく、そのため病理医の勤務していない多くの病院やクリニックでは東京の大手検査機関に病理診断を委託することが通常でした。しかし、検体の移送などに時間を要するため結果報告に10日ほどかかり、また、結果に対する問い合わせも瞬時の対応が困難な状況にありました。このような状況から、県内の病理医のいる病院とない病院の“地域医療格差”を少しでも減らすために病理診断専門施設の必要性を感じるようになりました。日頃ご指導いただいている病理医の先生方に相談したところ、多くの賛同と協力を得て2003年3月開業に至り、今年で創業20年目を迎えました。

創業当初、地域医療の一員として受け入れていただけるか心配でしたが、大手検査機関との差別化を図るため、通常は文章のみの診断報告書に、診断の根拠となった細胞像や組織像のカラー写真をすべての報告書に1枚添付する独自のシステムを開発しました。臨床医から患者に病状の説明がしやすくなったと好評で、依頼件数が年々増えていきました。現在は3～4日で診断報告ができ、患者さんにとって不安な結果の待ち時間を短縮できたほか、迅速な治療にも繋がっていると思っています。

【病理組織診断報告書】



【細胞診報告書】



■多くの方々と出会い支えられて！

私は、両親、恩師、先輩、同僚など多くの方々に支えられこの道を歩むことができたことに感謝しています。父は奈良海軍航空隊予科練出身でとてもきびしく怖い存在でした。底引き漁船の船長をしていましたので、長男の私に後を継がせようと、中学の頃から漁船に乗せられましたが、船酔いがひどく体質的に難しいところがありました。そんな私を高校の担任が気にかけてくれて進学クラスでありながら就職を選んだ私を案じ、家に来て「就職するにしても別の道を選んだほうが良いのではないか」と父を説得して下さり、先生のお兄様が事務長を務める北里大学病院に事務職として就職することになりました。

先生の勧めで事務の仕事につきましたが自分には馴染めず、かと言っておめおめと地元に戻ることも出来ません。そんな折、手術時にメスなど器具を渡す直接介助を募集しているからと事務長に配慮していただき、同病院の手術室で働くことになりました。手術室では簡単な盲腸の手術から教わり、2年後には胃癌の手術介助を任せて頂きました。充実した日々を送る中で、手術を決断した患者さんの苦悩や不安と向き合い、100%完全な手術を目指す医師、看護師の技量と集中力に接し学んだことは、今も私の医療人としての礎となっています。

手術が終われば外科の先生方に誘われて食事に行くなど、周囲の方々に大変可愛がっていただきました。そして特に可愛がってくださった研修医が「何か国家資格を取ってみないか」と提案してくださり、新たな道が拓けました。早速、仕事をしながら夜学の臨床検査技師になる学校に通い国家試験に合格、その後、各臓器の細胞を顕微鏡で診断する細胞検査士の仕事を知って強く惹かれ、日本初の癌専門研究機関の「がん研究会」が手掛ける「細胞検査士養成所」で学びました。いずれもとても険しい道のりでしたが、大学病院の先生や先輩、同僚方に期待と応援を寄せていただき乗り越えることができたことに感謝しています。



(執務風景)



■父が身をもって教えてくれたこと！

あの気丈で我慢強い父が体の不調を訴え入院したことを機に、細胞検査士になった私は地元の由利組合総合病院に就職することになりました。院長から「お父さんを診断することになるが大丈夫か」と言われ、私が父のがん検査を担当することになりました。そして検査を進める中で憎々しいがん細胞を顕微鏡の中に見つけた瞬間、愕然とし涙が止まりませんでした。末期の肝臓癌でした。結局、父は54歳でこの世を去りました。

父の診断を担当するまで私は、病院内に細胞検査士は自分一人という自負もあって、がん細胞を見つけることにやり甲斐を感じていたのです。しかし、父の死後にはがん細胞が見つからなかったほうが「嬉しい」、「良かった」と感じるようになりました。きっと父は、身をもって「お前のがんと診断するということは、その家族、親族、友人まで周りの人を不幸に陥れることになるんだぞ」と教えてくれたのだと思っています。以来、診断することの重みを感じながら「がん細胞でない」ことを祈るような気持ちで顕微鏡に向かっています。

■依頼書から患者さんの声を聞け！

病理の仕事は“書面でのキャッチボール”で、直接患者さんと接することはありません。しかし、私たちの側には確かに患者さんがおられます。一人ひとりの検査依頼書に耳をかざせば、患者さんの痛み、苦しみ、悩み、つらい声が確かに聞こえてきます。その患者さんの声が聞こえないようならこの仕事はしてはいけないし、今聞こえていても聞こえなくなった日にはここを去るべきだとスタッフには伝えています。厳しい言葉かもしれませんが、そんな強い気持ちでこの仕事に臨んでほしいと思っています。



(社屋 外観)

■検診の重要性！

みなさんをご存知のように、秋田県は都道府県別がん死亡率がワーストワンです。正確で迅速な診断に努めるとともに健診の重要性を伝え、受診率を高めることが何より重要と考えています。

健診は早期癌（完治できる癌）を発見するのにとても有効な手段です。現在、日本人が一生のうちに「がん」と診断される確率は、男女ともに2人に1人となりました。また、がんで死亡する確率は男性が4人に1人、女性が6人に1人となり、さらに増加していくと予想されています。がん発生臓器の順位では、1位大腸、2位胃、3位肺、4位乳房、5位前立腺の順に多く、がん死亡数の順位は、1位肺、2位大腸、3位胃、4位脾臓、5位肝臓となっています。進行癌（治りにくい癌）の患者さんのほとんどが、忙しい・面倒臭い・医者嫌いの理由で健診を受けていなかったと考えられています。

実際、進行癌の病理診断報告書を見るのはとても辛く苦しい思いです。もっと自分の身体を労わっていたら（自己管理をしていたら）、少なくとも大腸癌と胃癌で死亡する患者さんは激減することでしょう。せつかくこの世に生を受けたのですから、長く家族と健やかに過ごせるように進んで検診を受けて頂きたい。これが、40年以上細胞検査士としてこの仕事に携わってきた私の願いです。

会 社 概 要

1 会 社 名	株式会社秋田病理組織細胞診研究センター (通称：AKH研究センター)
2 代 表 者	代表取締役 阿部 一之助
3 所 在 地	〒010-1211 秋田市雄和椿川字奥椿岱12番地8
4 電 話 番 号	018-853-5806
5 F A X	018-853-5816
6 U R L	http://www.akh-rc.jp/
7 E - m a i l	akh-rc@mbr.sphere.ne.jp
8 設 立	2003年（平成15年）3月
9 資 本 金	2,500万円
10 従 業 員 数	37名（うち非常勤15名、2022年5月現在）
11 事 業 内 容	病理診断、細胞診断、手術中迅速診断
12 沿 革	2003年 由利本荘市に秋田県第23号登録衛生検査所として発足 2006年 由利本荘市薬師堂に新社屋完成、移転 2008年 クールスコープを用いた術中迅速病理組織診断を開始 2012年 日本臨床細胞学会施設認証取得 2015年 業務拡大のため、秋田市雄和に新社屋完成、移転